

第1巻 地形と環境

総説

地形と環境は、市川の歴史を考える上での基盤となる条件であり、欠くことができないものである。前回の市史以降、市内ではボーリング等の地質調査が進み、多くの資料が集積されている。このため、最新の地質情報を盛り込んだ形で、環境復元に取り組む必要性が生じている。

第1巻では、こうした現状を踏まえた上で、市川市内の土地が初めて陸上に顔を出した13万年前以降の地形と環境の変遷史を明らかにし、時代を経て変化する市川の歴史の「舞台」を復元する。また、前回の市史「現代編」で昭和以降のみを対象とした災害の歴史を、文献・映像等の資料を駆使してより古い時代まで調査し、災害記録を網羅的に記述する。

第一章 環境の変遷

13万年以降の市川の地形と環境の変遷を明らかにする。ヨーロッパアルプスの氷河編年ではなく最新の海底コア（酸素同位体ステージ）による編年を行う。

◎気候 ◎海面変動 ◎植生

第二章 地形のなりたち

時代によって変化する市川の地形景観と環境を復元する。

◎海岸線と河川流路の変遷 ◎下総台地と段丘の生い立ち ◎低地の発達と市川砂州 ◎ 関東平野と市川の地形

第三章 動植物相の変遷

貝化石や微化石（花粉・珪藻）から市川の動物相や植物相の変化を記述する

◎動物 ◎植物

第四章 災害の歴史

文献や映像に残された災害（水害・津波・地震）の歴史を網羅的に記述する。

◎水害 ◎津波 ◎地震 ◎地盤災害（地盤沈下・斜面崩壊）

附編 市川の歴史と環境の変遷のすりあわせ（年表）

※◎は、節として取り上げたい候補。

※※ボーリング調査などの野外調査や微化石（花粉・珪藻）分析をおこない、その成果を本文に盛り込む。

第2巻 ムラとマチ

総説

この巻では市川市域を舞台にした人々の営みを、市民になじみの深い郷土市川のムラやマチの形成に視点を置き、旧石器（先土器）時代から江戸時代までのくらしやなりわいを通時的にみる。

市川に最古の住民が生まれたのは先土器時代であり、やがて縄文時代には日本有数の貝塚密集地帯となってゆく。弥生時代には農耕の開始によりムラが大きく発展し、古墳時代にはその力を背景に巨大な権力のシンボルとしての古墳も出現する。そして飛鳥～平安時代には政治の発展により国府などの近辺にムラとマチが出現する。鎌倉時代以後は過酷な百姓や下人のくらしが垣間見られるが、やがて現代につながる村や町、日蓮宗などが地域に定着する。江戸時代には幕府の近郊地域としてさらに発展し、巨大都市江戸を支える住民の発展がさらに加速する。ここでかたちづくられた郷土が、やがて現代の市川市の源流になるのである。これらのことを最新の研究成果をもとに具体的・立体的に描くのが本巻である。

市川最古の住民たち 旧石器（先土器）時代

市川最古の住民の生活を扱う。

縄文の海と貝塚 縄文時代

日本有数の貝塚密集地帯のくらしを明らかにする。

稲作のはじまりと環濠集落 弥生時代

農耕の開始によるムラの変化を追う。

葛飾の覇者を支えた人びと 古墳時代

古墳とムラのかかわりを捉える。

国府・国分寺の成立とくらし 飛鳥～平安時代

国府・国分寺の消長とムラのかかわり。国府域となる地域、以外の地域を比較の比較。

鎌倉～戦国時代の村町のすがたといのり 鎌倉から戦国時代

過酷な境遇にある中世の人々がおこなう村町の姿や日蓮宗の動向を追う

江戸時代の村町のくらしとなりわい 江戸時代

巨大都市江戸の出現により劇的に変化した江戸時代の市川の生活と生業を追う

第3巻 古代国府と中世府中

総説

奈良時代の市川は、国府・国分寺が建立され、『万葉集』に詠われた。1つの自治体でこの3つの事例がそろふことは、全国でも少なく、市川の歴史の大きな特徴となっている。しかし、前回の市川市史では、発掘の調査報告が多くを占め、歴史の叙述は少ない。専門的な事実の羅列に市民の不満は大きい。さらに、前回の市史から調査や研究が飛躍的進み、対応できない歴史事実が生じている。

3巻では、その反省を踏まえ、なぜ国府・国分寺がこの地に建てられ、万葉集に詠われたのか、という市民が抱く素朴な疑問をテーマに、古墳時代～奈良・平安時代の市川を、国府・国分寺の成立以前、成立と展開、変容、万葉集から明らかにする。また、研究の現状を示し、市民の意識向上を図るため、現状で曖昧な点、不明な点、これからの課題などを明記する。

ヤマト王権と葛飾の覇者 国府・国分寺以前の市川

市川に国府・国分寺が造営される理由を、古墳時代の市川から捉える。

◎ヤマト王権と下総・葛飾 ◎市川の古墳の成立と展開 ◎国府台の古墳とヤマト王権

国府のまつりごと・国分寺の祈り 律令制国家成立と市川

下総国府・国分寺が造営された、下総国の中心となった市川の姿を探る。

◎下総国の概要 ◎下総国府の成立と展開 ◎正倉院に残る下総国の戸籍 ◎下総国分寺の造営 ◎国府の生産と流通

手児奈を求めて 万葉集と市川

万葉集に詠われた市川と、万葉集に登場する手児奈の実像と伝説に迫る。

◎葛飾・市川の歌と作品論 ◎万葉集の景観 ◎手児奈と古代の女性 ◎手児奈伝説の成立

古代から中世へ 律令制国家の変容と中世社会の成立

平安時代から鎌倉時代への変化を追い、国府・国分寺の変容と終えんを迫る。

◎考古資料からみた 900～1000 年代の画期 ◎律令制国家の変容と反乱 ◎六所神社の成立
◎国府と守護所

戦国時代の房総と市川

「府中」以後の戦国時代、市川の置かれた政治的位置と戦争の時代を描く

◎戦国時代の市川と須和田桑原氏 ◎第一次・第二次国府台合戦と市川 ◎中世市川の館と城

第4巻 現代都市への変貌（変貌する市川市域）

大まかに言って軍都であり農村でもあった都市近郊の近代の市川（市域）が、高度経済成長以降の人口の急増、住宅都市として現代都市に変貌する様相と、現代都市が抱える問題点をシャープに描ききることを狙いとする。この巻は明治維新から20世紀末までの約130年間を対象とし、前回市史の刊行以降（昭和50年代以降）の歴史も扱う。

近代市川市域の都市化

都市化のはじまった明治期から昭和戦前期までの市域の様相を描く

◎町村制下の市域町村 ◎1934（昭和9）年の市域施行 ◎軍都一陸軍教導団と野砲兵連隊一 ◎水運と鉄道 ◎学校教育の進展

第2次世界大戦後の都市化

都市化が本格化する昭和戦後期から平成期の市域の様相を描く

◎大柏・行徳・南行徳の合併 ◎行政機構の変化と増大 ◎旧軍用地国府台地区の変貌
◎東西線などの開通と宅地化の進行 ◎商店街の発展

農業の変貌

明治期から平成期までの農業の変貌の様子を都市化の視点から描く。

◎明治・大正期（近代）の農業生産 ◎水田農業の変化 ◎都市近郊の商品作物
◎農業・農家の衰退化と農地の宅地化

臨海部の埋め立てと工場

埋め立てや道路整備等を中心に市域の工業化について明らかにする

◎大正期における工場と労働運動 ◎行徳地域における臨海部の埋め立てと進出工場
◎埋め立てによる臨海部の公害と環境悪化 ◎高速道路の建設と外環道路計画

都市問題の多様化と市民の活動

市域の様々な都市問題について市民の動向とともに描く

◎水害とその対策 ◎区画整理と都市計画 ◎都市環境の悪化とその対策 ◎多様な市民の活動

第5巻 民俗（仮称）

市川市は大柏村（昭和24年）、行徳町（昭和30年）、南行徳町（昭和31年）と合併し、埋め立てを含めて現在の面積になりました。農業、漁業が盛んであった時代、軍都であった時代、田畑、蓮田が宅地化され、河川の改修工事が進み、市川市は首都圏の大都市に発展していきました。その過程で失われたもの、忘れられたものをも含めて、江戸時代から脈々と続いてきた市川名産の梨栽培や果物・野菜栽培、草花栽培を初め、行徳の塩作り、海苔の養殖、漁業など、農業・漁業に深く関わってきた人びとの日々の暮らしを浮き彫りにします。そこには子どもの遊びと生活も含まれます。また、古い時代の町や村と都市化・市街化した現代の町空間との比較も視野に入れます。

〔第一部〕 総説／農村の民俗・漁村の民俗

第一章：生産と生業（塩作りの一年／梨作りの一年／果物・草花作りの一年）

第二章：ムラとイエの生活

第三章：人の一生

第四章：年中行事

第五章：民間信仰

第六章：芸能と口承文芸（地元の笑話「じゅえむ話」の集大成／方言）

第七章：子どもの遊びと生活

第八章：法華経寺と門前町／行徳街道と寺町／行徳の神輿造りと祭／文人の通った道

〔第二部〕 町場と都市の民俗

第一章：ムラから町へ

第二章：古い町場

第三章：新しい町空間

第四章：町の中の民俗

第五章：個人史の世界（農民・漁民・職人・商人・産業など）

第6巻 自然とその変遷

趣 旨

古く人がくらすようになったころ、市川の自然の姿はどうであったか。自然の変遷が人の生活にどう影響を及ぼしてきたかを、いろいろな資料から推測する。

近年、人の活動の増大や人口の増加によって、自然に対する働きかけがしだいに強くなり、これが自然の改変をもたらすようになった。自然との調和の上に成り立って生活する時代から、自然を改変し利用する時代へと移り変わってきた。

特に 20 世紀後半からはこの傾向が著しくなり、自然本来の機能を衰退させることで、人の生活への負の影響も現れるようになった。

市史としては、そのような変遷や 21 世紀初めの現状を記録し、将来を展望する資料とする。

1 章 昭和時代までの自然

1 節 農耕以前の自然についての推測

当時の植生や動物相の推測

→花粉分析（調査団、業者委託）

貝塚などの遺物の分析（調査団、業者委託）

古地形の解析（調査団、業者委託）

2 節 農耕導入による自然の変化

農耕による植生などの変化

→1 節の調査成果を活用

3 節 自然とともにあった暮らし

田園風景広がる市川での暮らし

→昭和の暮らしの聞き取り（学校ルートなどを活用して年配の方から聞き取り、学校記念誌・地方誌などの記述）

古写真収集（調査団、映像文化センターの協力）

2 章 20 世紀に起きた自然の変質

1 節 高度成長がもたらした都市化

地図などによる都市化の検証

→地形図（土地利用）・植生図・古い航空写真などを用いた 検証（調査団、業者委託によるデジタル化）

一次産業の動態・人口動態の検討（調査団）

聞き取りデータ・古写真・航空写真の活用（調査団）

2 節 都市化による自然の変質

生物生息環境（ハビタット）の質的な変化と、その意味

→失われた土地利用（湿地など）と、新たに拡大した土地利用（盛り土・舗装など）のもつ特性（調査団）

ハビタット総体としての景観の変遷

→石井信義氏が描かれた細密画、景観写真などの活用

唐沢委員所蔵写真の活用（デジタル化）

3 章 都市生態系の登場

1 節 都市化を特徴づける生物

市域を地区に分け、分類群ごとに検討

→都市を選択した生物（→タヌキ・ハクビシン・アブラコウモリ・カラス・ムクドリ・帰化植物・帰化昆虫など）の現況調査（調査団、業者委託）
都市化による生物相の変化

→新旧の種組成記録の対比（調査団）

2節 都市気候

都市化にともなう気候的な変化を記録する（ヒートアイランド、ビル風など）

4章 自然を保全する取り組み

1節 行徳近郊緑地特別保全地区に対する取り組み

→行政資料収集（調査団）、関連団体出版物収集（調査団）

関係者聞き取り（調査団）

※以下の節、同様

2節 大町自然公園に対する取り組み

3節 国府台斜面林に対する取り組み

4節 小塚山・堀之内貝塚に対する取り組み

5節 尊菜池緑地に対する取り組み

6節 江戸川・江戸川放水路に対する取り組み

7節 東京湾に対する取り組み

8節 真間川水系に対する取り組み

9節 そのほかの取り組み

さまざまな保全活動、多自然工法、ビオトープ、学校ビオトープ、里山ボランティア、環境教育など

10節 行政施策

市川市環境基本条例、保存緑地、文化財（巨樹巨木を含む）、みどり会、自然博物館、自然環境実態調査、東京湾保全など

5章 （市史出版時点での）市川の生物相

1節 動植物の実態

種名リスト

→実態調査報告書より作成（調査団）

補足調査実施（調査団）

2節 市内の自然の概況

森林、湿地、河川、海、住宅地などの現状

→新規調査（調査団、業者委託）

結び

21世紀の歴史を刻み始めた市川のこれからに向けて

快適で豊かな都市生活と引き換えに、かけがえのない自然環境を手放してきた20世紀を受け、21世紀は豊かな市民生活という言葉の内容に「身近な自然環境」という概念を再度加え直し、20世紀後半に芽生えた自然と共生する都市生活という、新たなライフスタイルを確かなものとしていきたい。